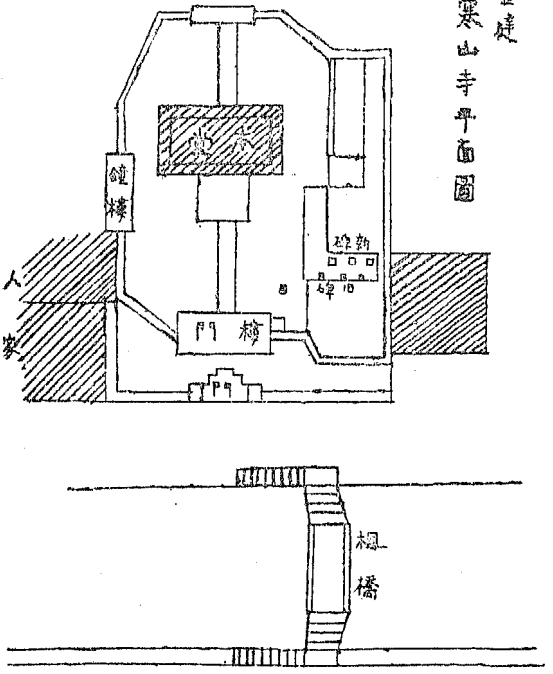
渡歐日記（第二信）

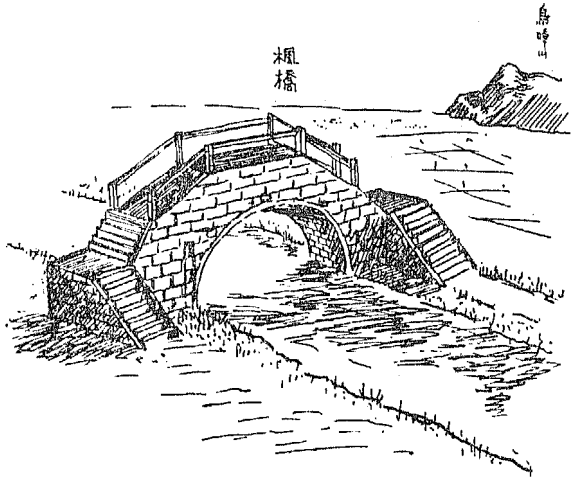
寺田貞次

港の觀察は之でとゞめまして翌二日は一日の暇があるので蘇州(Soochow)邊を見物するのが旅行者の普通行動になつて居る自分も德岡英、本永七三郎、渡邊誠、中村政司、升本、長田、諸氏と共に蘇州見物に出た、國際勞働會議出席者の一團も同じく見物をしました、折惡しく夜中來の大雨が晴れない、蘇州行の汽車は上海發午前七時と九時とが便利で之れに乘れば蘇州へは約二時間で着きますから午後四時半の汽車で六時半には歸着し得られます、一行は雨天のために一汽車おくれ九時發に乘りました、旅館から自動車で上海北驛に至り（上海北站(Shanghai North)）（此間五分許）乘車、鐵道は所謂滬寧鐵道で蘇州迄には眞茹、南翔、黃渡、安亭、陸家濱、恒利、昆山、正儀、唯亭外跨塘、官濱里、の諸驛を通過します、一行は二等に乘りましたが中央に通路をつくり、兩側に貳名づゝの腰掛を備へ（籐製）四名對座し其中央に小机が置いて在る食堂とても無いが茶を始め注文に應じて何でも食物が運ばれます、茶は四人に對して土瓶二個を出し一個に付十錢を要求しました、支那人等は携帶の食物菓子で談笑しつゝ旅行する愉快氣に見えました、雨中で遠望が出來ないのは遺憾でしたが日本と異て一望の平野で田園廣く開け、處々溝渠を有し楊柳此處に生じて田舍屋の楊柳につゝまれ居るも文人畫的で面白くながめられました、作物は別に日本と大差がない今は麥、油菜、蓮華草、蠶豆、等が一面につくられて居ます、日本の田園の樣に隅から隅まで手の行き屆て居ない處は流石大陸と思はれました、之れが揚子の沿岸に沿ふて奥迄擴がつて居るのかと思ふと揚子の沿岸支那穀倉の名も理と感ぜられました、約一時間右に昆山塔を眺む大沖積平野中の孤立丘陵上に高く聳え人家も稍多きを見受けました、間もなく左方に西陽湖を眺め運河の漸次多きを覺り又右に陽澤浦をも見る、牡蠣の產地と聞く、やがて汽車は蘇州に着下車、一行は支那語に通ずる者もないから實を申すと見物には困難であつたのですが丁度一行中の中村政司氏の同窓で東京醫科大學出身の支那人李堀身氏が上海から乘り合はせたので案内を乞ふ事になり好都合でした、驛頭は支那人の人力車、馬車で充滿して居り下車の客を圍んで騷ぎたてる、支那語に通ぜざる余等には唯やかましきのみ李氏の厚意にて難なく馬車に分乘雨を冒して蘇州市街に走る康熙元年改築の城壁は廣く擴がりて（周圍四十五支那里、高さ二丈八尺と稱す）ゆかし、馬車の停止する處留園で

ある壯大なる一邸宅支那式の住宅に入るのは始めてで敷きつめたる瓦磚から壁にはめこまれてある瓦磚に至る迄眼新しからざるはなく、留園全園の突立を見ては園内の擴きに驚かされ、李氏の案内で順次園内をめぐる、數多き茶室數奇をこらし、池園には奇岩怪石をたゝみて綠樹の深く茂れる、廻廊の複雜なる出口を失ふと稱するも故なきに非ずと思はれ、案内者を見失はざる樣つとめし程でありました、案内記に依りますと此園は昔し劉氏のもので劉園と申しましたが後、盛宣懷氏の父の有に歸し永久保存したいと云ふ希望から留園と改稱したと申します、誠に南支那第一の別莊でかゝる名園を個人で經營した支那富豪の偉力に驚かされる今は入園料を徵收し一般の縱覽に供して居ます、次で數町をへだてた、西園に案内されました、此園は勅建西園戒憧寺の附屬園であります、寺は樓門から本堂の大雄殿、羅漢堂、食堂、座禪堂等を備へ我が黃檗山を忍ばせる大寺です、殊に羅漢堂は日本の各所に見る羅漢堂とは異て等身大以上の大羅漢像が蓋花塊、寒山拾得、等より第五百番の鉢利羅尊者に至る迄相並び其間に千手觀音像普陀山等があつて我國の三十三間堂の感にうたれました、掃除が行き屆て居ないのは遺憾に思はれます、西園は堂の左方に在りまして園には奇岩怪石、池中には鯉魚をも見茶室も備はつて居りますが留園を觀た眼には差程と感ぜられませぬ然し留園に次ぐ名園です、再び馬車をとばして程經たる寒山寺に向ひました、唐の張繼が楓橋夜泊の詩と寒山拾得で名を得て居る寒山の住つたので有名な寺ではありますが、河方開基は梁の天監年間と申し古い事でもあり幾回かの興廢にあひ近くは長髮賊の兵亂のために烏有に歸し全く廢頽してしまひました、現今の寒山寺は光緒三十年に時の巡撫程德全氏

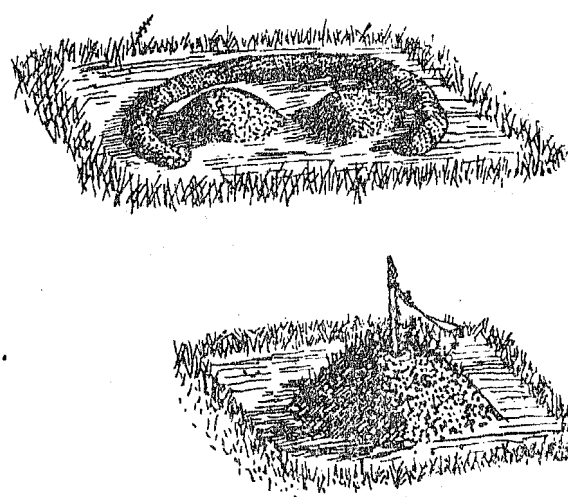


が名跡の湮滅を惜んで修堂したもので本堂、庫裏、鐘樓等は在りますが規模の小なる街家密接の處に在て境内並に附近の不潔なる到底縱覽に價するものではありませぬ然し門前の運河には

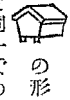


楓橋と稱する長さ十二三間の穹窿狀古雅な石橋を存して運河は大運河より流れたる小運河であるとは云へ運搬の支那丹は常に往來し、橋より遙に眺むる小丘は烏啼山と稱せられ、荒廢其極に達して居るとは云へ寒山寺の古鐘と稱する小鐘も備へてあるので何となく楓橋夜泊の古を忍ばしめる處は一興です、此處が眞の舊址であつてもなくても古き都の蘇州を訪ふ人は一覽しても損にはなるまい有名な「月落烏啼山」の碑は本堂の右(向て)側堂の壁内に保存されてありますが既に欠損し讀得る字は少くありますので今は巡撫程德全氏の盡力により時の大儒俞曲園の書いた新碑が其前に建てられてあります本寺修堂の由來は光緒三十二年德清俞越撰の新修寒山寺記が瓦碑に刻して堂壁に保存されて居ますから之を讀めば明に知られます蘇州寒山寺碑(新及舊)圖、寒山拾得圖、孔子廟石碑の拓本は當寺で求めることが出來ます一枚四十錢です、空は稍晴れ氣味になりましたから馬車のホロをはづし景色をながめつゝ市街に歸り城内を散歩します狹い道路に商家ひしと立ち並んで繁華らしいが甚だきたなく感服しなかつた、此町は之より少し西に無錫と共に養蚕の本場で繭の產地で生絲、絹織物の產地であります、見渡す處日本の養蚕地の樣に桑園多く、絹織商、衣服商は多く見受けられ、又燐寸、塵表莫産、麥稈帽等の商店も多く見受けました、刺繍も盛で各所に之を見受ました、晝食は旅館からサンドヴィッチを用意して來ましたが李氏の案内で姑蘇大馬路鳴岑橋西堍の久華樓と云ふに一休、京都式(卽北京式)の料理を試した、八人で僅に三圓五十錢チップ四十錢(ボーイ二人に付)で老酒(ラウチユ)迄試ることが出來た、時將に四時に近くなつたから人力車で急がせ蘇州驛に至り、李氏の見送を得て歸路についた、尙此他見

物すべき處としては城内にある北寺の塔、之は蘇州驛に着くとよく見える九層の高塔で案内記には報國寺と稱し吳の赤烏時代の建立、昔の蘇州七塔の一つで高さ二十五丈、江南第一の高塔長髮賊の亂にも災を免れたと書いてあり、又蘇州驛の西北方には虎邱と云ふ小丘があり丘上に古塔が立つて居るのが見えます之は春秋の世に吳王闔閭を葬た處と申し右の丘上には秦の歌岐置旗墓正面に仙人呂昇及び祖隣の像碑在り虎邱禪寺と稱する晉代開基の寺堂もあり又靈巖山とて山上は吳王の離宮址で、吳王の越の死敵を幽閉した石室もあると云ふ又天平山とて金山奇岩怪石より成り、南麓には白雲寺と稱する紅葉の名所すらある由記してあり面白さうなが見物の暇がなかつた、要するに蘇州は南支那に於ける古い都で禹貢には揚州、春秋には吳の都、秦には會稽郡、漢代には吳郡、陳の代には吳州と稱し隋の世に至り始て蘇州と稱したと申し二千有餘年の歷史を有し城壁の如きは闔閭王の時既に之を築いたと稱します、兎に角文化の古い町だけあつて人口も稠密五十萬を數へ江蘇平原の中央都市として優美で文墨の地として發達し海岸よりは五十里もへだてゝ居りまして近世文明の刺激を受くることが少いために極くゆつたりした處でありましたが長髮賊の亂に長く占領され市街名跡共に廢頽に歸しました其後漸次廻復に向ては居ると申すものゝ間昔日の如くでなく自分共の發見した處でも破壞のまゝに委せられてある跡をよく認める事が出來ました、然し此地は附近に湖沼河溝等多く四通八達の便を有し米を始め農產の集散地として重要の地位にあり現今の處尙工業の發達を見ずと雖農產原料に富むを以て將來工業地として有望であらうと申す人もあります、殊に日本にとりましては無錫と共に繭の供給地であり日本領事館



も置てある位ですから單に名蹟地としてのみ見物すべき處ではないのでありますから、今の處尙蘇州は名蹟地として注意される以外實業方面の注意を引く事の少いのは遺憾であると地

方の人は申して居ます、支那郊外を旅行しまして注意を引きましたのは住民の墳墓であります上海の市街で一鐵道の沿線でも至る處墳墓が散在して居ます墳墓は小圓墳をなせるものと瓦葺の小煉瓦屋の如き形と二種あります、支那では今尚火葬をしないで死骸は之を木製の棺、よい所になりますと樟樹製の棺に入れて所有の田畑に置く、極く普通のものは棺を田畑におき上を藁にておほひ腐敗にまかせるのであり、少しよい處になりますと煉瓦にて棺の周圍をかこひ上に瓦屋根をつくり、何ヶ月か其まゝに放任し費用の出來るを待ちて上より土を以ておほひ圓墳を築くと聞きました墳上には竹に白紙を日本の幣の如くして立てゝあります、此圓墳は先端のとがつて居るのと、然らざるもの等種々あり塚上には樹を植えない、中には夫婦二墳相並べ周を土にて土堤をまはすもあり又周に樹木を植えてあるのもあります、之が身分のある人になりますと此墳形が大きくなり門を備へ石製の馬・駱駝等の建物を置くことになります、蘇州に行く沿道で二三此式のものを見ました、支那は舊習墨守の國でありますから佛教の傳來によりて火葬をすゝめても人民間にしみ込める古來の風習は遂に之を捨てることが出來ないで此の墓制をとつて居るもので此の風習は古來變化がないものと見て宜しい、我國古代の墳墓は確に此の風習を學んだもので、支那で棺を埋めず地上に置き其上を土にておほひ圓塚になす方法は我が藤原時代迄の葬法と同一であります我國にて傳説によく死骸を原野にすて鳥獸の食にまかせたとの話があります私の幼少の頃には小野小町を私の住地より西の方の地に捨てた鳥獸が來て之を食たと祖母から聞て不思議に思つて居ましたが今思ふと平安朝頃の葬法を物語て居るもので現今支那人の棺を田野にさらして腐敗にまかし死骸の露出せるものが處方に散在せるのと同一で將しく此の葬法を傳へたものと考へます、棺の如きも現今支那に墳墓露出して居る棺を見ますと  の形に造てあります之れは我國古代の石棺又は陶棺の形と同一であるのを見ますと我國古代の棺も支那の影響を受けて居ることが知れます、但し日本は佛教の傳來と共に火葬を採用しましたので支那式の墳墓の形式は早く失はれる樣になつたので之を國民性の差の致す處と考へました。

編者曰。寺田君は既に倫敦に安着されましたが、本篇の續稿は續々學園に寄せられて居ります。本渡歐日記は同君一流の綿密周到な觀察によつて詳細に記述され、本誌に光彩を添へられて居るのは讀者の知らるゝ所で、本篇が後來の渡航者の指針となるのは勿論地理教授上の生きた參考材料として貴重なることは讀者諸賢と共に喜びに堪えない所であります。